



Title	現代英米語における目的節を導くthatの有無：通常thatを伴うとされる動詞について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 247-260
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代英米語における目的節を導く that の有無： 通常 that を伴うとされる動詞について

大津智彦

1. 筆者は大津（1993）で現代イギリス英語における目的節を導く接続詞 that（以下 *that*）の有無とそれに影響を与える要因に関し調査を行った。しかし、その際、過去の研究との比較をする都合上、調査対象について幾つかの制約が加わった。例えば、目的節を従える動詞を say, tell, know, think の4つの頻出動詞とし、コーパスとして用いるテキストの範疇も数種類に限ったものであった。また *that* の有無を左右する要因に関しては、その個々の影響力の程度についてはある程度掴めたものの、それらが連携した時の作用にまでは目が配れなかった。

このようなわけで同研究で興味深い事実は得られたが、調査すべき点はまだ数多く残されている状態である。なかでも前回の調査では目的節を抽出する為のもととなった動詞が頻出動詞の4つであることから、他の動詞においては *that* の出没がどの程度のものなのか、また、前回その現象に影響を与えると確認された要因が別の動詞においても同様の働きを見せるのかどうか調査を試みる必要があると思われる。さらにイギリス英語とアメリカ英語はそれぞれこの問題に関してどういった様態を見せているのかも興味深い。

ところで、目的節をとる動詞には *that* を伴う傾向の強いものや弱いものなどそれぞれ差があることが知られている。例えば Fowler（1965）は包括的ではないがそれらの動詞を整理して、(1) *that* を伴うのが普通のもの、(2) *that* を伴うのが普通ではないもの、(3) *that* を場合によって伴ったり伴わなかったりするもの、の3種類に分類している。¹ Fowler のこの分類には Jespersen（1927）や Poutsma（1929）も触れ、一定の評価を下しその正当

性を支持している。²しかし、このリストでは大体の目安を得ることはできてもそれ以上のことは一切わからない。例えば分類中の用語にある“普通”あるいは“普通ではない”とはどの程度の状態を示しているのであろうか。

さて、*that* の有無について前回の研究よりもさらに多くの動詞に対して調査する必要があることを上に述べた。前回用いた動詞は Fowler の基準に照らすと、言及のないひとつ (tell) を除き(2)か(3)に属するもので、この2つのグループについてはある程度の様子がうかがえる。しかし、(1)の *that* を伴うのが普通であるとされている動詞のグループについて何もわからずおらず、また、他の研究においてもこれについて触れているものはないようである。このような理由から今回は一般に *that* を通常伴って現れると信じられている動詞に焦点をあて、現実のところはどうであるのか様々な角度から見てみたい。

2. 今回も前回と同様にコンピュータコーパスを利用した調査を行う。

コーパスとしては現代イギリス英語を代表し LOB Corpus、現代アメリカ英語を代表し Brown Corpus を用いる。周知のように両コーパスともに全く同じ設計の元に構築されたもので、英米語間での一対一の比較を可能にしている。³検索する範囲は両者とも全コーパス、100万語である。検索方法は対象とする動詞を軸として定め、それらが率いる目的節をすべて抽出することにする。⁴ただし、目的節は能動態の動詞の直接目的語となる名詞節のみを対象とし、外置された目的節、“accept the fact that...” のように名詞と同格になる名詞節、“This, he says, is true” のように陳述の部分にそれを導くべき節が挿入されているケースなどは除く。対象となる動詞は上に述べたとおり *that* を普通伴うと考えられているものであるが、これは Fowler (1965) にあるリストを参考とし、その(1)に属する17の動詞のうち頻度が高く、コンピュータによる検索上不都合のない10の動詞 (agree, announce, argue, assume, indicate, learn, maintain, observe, remark, suggest) を選んだ。⁵ *that* を普通伴うとみなしうる動詞はこれらの他にま

現代英米語における目的節を導く *that* の有無：通常 *that* を伴うとされる動詞について

だ多くあると思われるが、本稿の目的は個々の動詞について辞書的な記述を与えるというよりも、全体の傾向を知ることにあるのであえてこれ以上は増やさなかった。

3. さて上の手順で抽出されたデータを複数の角度から検討する為、いくつかの要因に基づき別々に整理した。それらの要因は過去の研究によって *that* の有無を左右するとされたもののうち、大津（1993）でもそのことが確認されたものである。それらの要因がどうして *that* 有無に影響を与えるかは既に検討済みなのでここでは触れない。また本稿は今回選ばれた動詞群が一定の条件下でいかなる振る舞いを見せるかを観察するのに主眼を置き、特に新しい要因を発見することは試みないことにする。

3.1. Figure 1 は対象となる動詞に関して、*that* を伴なわない形（以下 zero）の比率を大きく LOB と Brown コーパスのみに区別して表わしたもので、今回選んだ動詞全体に関する傾向と、その英米語間での差が明らかになっている。⁶ グラフによって一般的に *that* を伴うのが普通であるとされる動詞でも10%前後 zero になるケースがあること、またイギリス英語に比べてアメリカ英語ではその傾向が5割方高いことがわかる。

これは *that* の有無に影響を与える複数の要因を合わせた全体的傾向なので、以下、どのような場合に zero が選択されやすいのか、またその要因に英米語間の差はないかどうかといった点に気を付けながら見ていく必要がある。

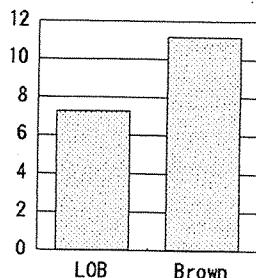


Figure 1 コーパス別の zero の比率 (%)

3.2. 今回の調査の中でも *that/zero* の選択にもっとも大きな影響を与えると思われる要因のひとつが目的節における主語のタイプである。Figure 2 は zero の比率に関し、目的節の主語が名詞の場合、LOB で 0.7%、Brown で 4.8% であるのに対し、それが代名詞である場合、LOB で 20.3%、Brown で 23.4% と両者に大差があることを示し、目的節の主語が代名

詞である場合の方が、zero を用いる比率が圧倒的に高いことを表わしている。ちなみにこのグラフでは出ていないが、LOB、Brown 全体での zero の総数のうち、目的節に代名詞の主語を持つ例はそれぞれ 94% (31例中29例) と 72% (46例中33例) を占める。⁷ このことからも目的節における代名詞の主語は zero を導く非常に有力な要因であることがわかる。

再びグラフに戻り、LOB では目的節の主語が名詞である場合と代名詞である場合の zero の比率の割合が約 1 : 29 であるのに対し、Brown ではそれが約 1 : 5 であることは指摘しておくべきであろう。これは Brown の方が不利な条件の場合（目的節の主語が名詞）でも zero の現れる割合が大きいということがあるが、Figure 1 で見たように Brown では zero を用いる傾向が全体的により進んでいることと関連しているものと思われる。つまり zero を用いる傾向の強さ如何によって目的節の主語のタイプの違いが *that/zero* 選択に及ぼす影響力が変化するということである。もし今回取り上げた動詞が時間的経過により zero を用いる傾向が進んだ場合、どこまでこの要因が *that/zero* 選択に関するか将来調査してみる必要がある。

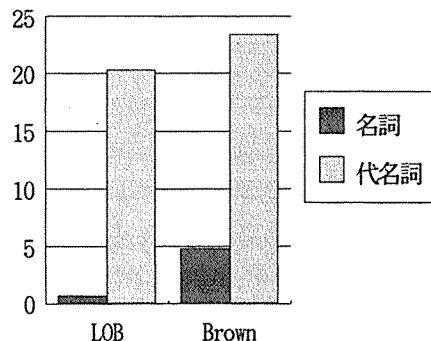


Figure 2 目的節の主語の種類による zero の比率 (%)

現代英米語における目的節を導くthatの有無：通常thatを伴うとされる動詞について

3.3 同じく大きな影響力を持つと確認された要因は、主節の動詞（今回対象の動詞）とその目的節の主語との間における副詞類の有無である。これは次に挙げるふたつの例文の両方の場合を問題にしている。

- (1) John said (this morning) *that/zero* the girl was gone.
- (2) John said *that/zero* (this morning) the girl was gone.

Figure 3 からわかるように副詞類がある場合とない場合とでは、LOB、Brown ともに副詞類がない方が zero の比率が圧倒的に高い。またグラフには出ていないが、LOB、Brown 全体での zero の総数のうち、副詞類の挿入のないものが LOB で 97% (31例中30例)、Brown で 93% (46例中43例) を占める。このような結果から、3. 2 の目的節の主語のタイプと同じく、副詞類の挿入の有無は *that/zero* の選択に特別な役割を果たしていると言える。

だが、同様のことは大津 (1993) でも確認済みで、今述べたことでは違った種類の動詞 (*that* を伴うのを通常とするもの) においても同じ現象が起こることが認められたというだけになる。しかし、今回の調査では従来の研究によっては指摘されたことがない、非常に興味深い事実を発見することができた。それは今、*that/zero* の選択に大きく関わるとして挙げたふたつの要因の互助作用である。

目的節の主語のタイプ、副詞類の挿入という別々の要因の下で観察した場合、上にも見たように確かに *that/zero* はそれぞれの要因に大きく左右さ

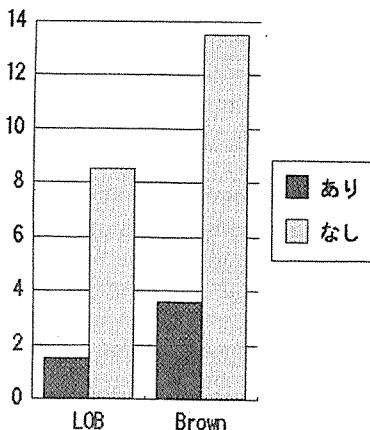


Figure 3 副詞類の挿入の有無によるzeroの比率 (%)

れているかのような結果が出る。しかし、この調査では前回に課題として残した複数の要因下での *that*/zero の交替を調べるべく LOB、Brown 全体で zero を伴う文をすべて拾い出し、それぞれの文が今回用いた要因についてどのような特徴を示しているか整理した。すると、LOB で 90% (31例中 28例)、Brown で 67% (46例中 31例) までが目的節の主語が代名詞で副詞類の挿入がないという特徴を持ち、この組み合わせが zero の選択に大きく関わっている可能性を示唆する結果が出たのである。さらにこの結果を確証する為、組み合わせの一方を変え、目的節の主語が名詞で副詞類の挿入がない場合と、目的節の主語が代名詞で副詞類の挿入がある場合の zero の比率をそれぞれのコーパス全体で調べたところ、前者の場合では LOB で 1% (235例中 2例)、Brown で 6% (216例中 12例)、後者の場合では LOB で 4% (24例中 1例)、Brown で 7% (30例中 2例) と非常に低い数値であった。ちなみに目的節の主語が名詞で副詞類の挿入がある場合、zero の比率は LOB で 0% (44例中 0例)、Brown で 2% (54例中 1例) とさらに低い数値を示す。これらの結果はいずれも上に述べた 2 つの要因の互助作用を裏付けるものである。

尚、これは筆者の知る限りこれまでの研究でまだ指摘されていないことであるが、副詞類の挿入がある場合、(2)のタイプの文ではすべて *that* が用いられ、挿入があっても zero が用いられているのは(1)のタイプの文においてのみであることも注目しておきたい。そして後に述べることの少し先走りになるのを承知で続けると、(1)のタイプでそのようにして zero が使われているのは LOB で 1 例、Brown で 3 例あるが、すべて Press (reportage) のカテゴリーに属し、このカテゴリー特有の文体的特徴であることを付け加えておきたい。その例を下に挙げておく。

- (3) The Dominican government announced today it had taken into custody one of the suspected killers. (LOB A31 2)
- (4) Board members indicated Monday night this would be done by

現代英米語における目的節を導く that の有無：通常 that を伴うとされる動詞について

an advisory poll to be taken on Nov. 15. (Brown A10 42)

3.4. Figure 4 に見られる主節の動詞

が定形 (finite) か不定形 (infinite) かという区別は、上に扱った 2 つの要因ほど決定的な影響力を持たないものの *that/zero* の選択を左右することを示唆する結果を示している。グラフからわかるように不定形に比べ定形の場合の方が LOB においては約 40%、Brown においては約 70% zero をとるケースが多い。今述べた観察はこの要因のみに着目した場合だが、既に見た 2 つの要因との互助関係を調べる為、これら 3 つの要因の値をすべて zero が現れるのに有利な方向に設定、つまり目的節の主語が代名詞、副詞類の挿入なし、主節の動詞は定形という条件で zero の比率を算出したところ、LOB で 28%、Brown で 37% であった。これは個々あるいは 2 つの要因が有利に働いた場合を大きく超える数値であり、それぞれの要因は単独で作用するものではなくお互いに影響し合ってることのさらなる裏付けと言える。

但し、このセクションで取り挙げた主節の動詞の形式はそれ自体影響力があまりないせいか、目的節の主語のタイプと副詞類の挿入の有無との間に見られた切り離せないような関係を別の要因を持つことは確認されなかった。

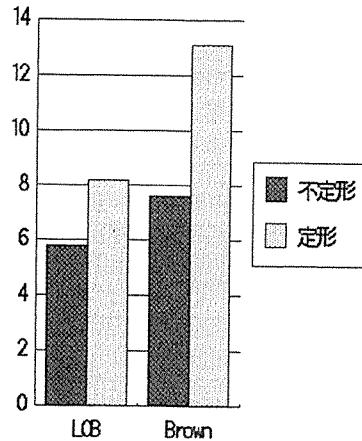


Figure 4 目的節を支配する動詞の形式による zero の比率 (%)

3.5 さて次に動詞別

には *that/zero* の交替がどうなっているか見てみよう。Figure 5 は動詞毎に LOB、Brown における zero の比率を表わしたものであるが、数値の高い上位 3 位は LOB で *announce* (21%), *maintain* (14%), *learn* (12%), Brown で *assume* (20%), *announce* (14%), *indicate* (14%) となり一口に *that* を伴うのが通常の動詞といっても当然のことながらそれぞれの動詞によって程度があるのである。それよりも興味深いのはその動詞毎の程度がイギリス英語とアメリカ英語とでは異なり、必ずしも同じ動詞が両者で同じように振る舞うとは限らないことである。その最も端的な例は *assume* で、LOB では zero の比率が 4% と最も低い部類に属するにもかかわらず、Brown では 21% と最も高い。なぜ同じ動詞なのに英米語間でこれほど違った振る舞いを見せるのだろうか。これはおもしろい問題を含んでいると思われるが、今回のコーパスの規模では収拾できた用例数が少ない動詞もあり、将来さらに大きなコーパスを使って調べてみたい。

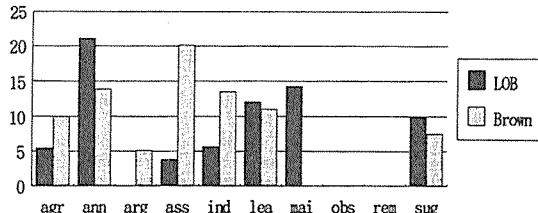


Figure 5 動詞によるzeroの比率 (%)

3.6 最後はテキストのカテゴリーの違いによる zero の比率の差である。コーパスの全カテゴリー数は 15 になるが、Figure 6 では K から R までのカテゴリーを *fiction* として一括して扱い簡略化していることを最初に断っておく。まず LOB について見れば K-R の *fiction* のカテゴリーですば抜けて zero の比率が高く、ついで *Press* の各分野のカテゴリーである A, B と C、そして *Popular lore* の F 等がぐっと低い線で並んでいる。これに対し Brown では A (*Press:reportage*) の比率が最も高く、K-R (*fiction*), E (*Skills, trades and hobbies*), H (*Miscellaneous*) の順に高い比率を維持し

現代英米語における目的節を導くthatの有無：通常thatを伴うとされる動詞について

ながら続く。ここでは何よりもイギリス英語とアメリカ英語とでは、同一のカテゴリーであっても両者では違った傾向を持つように現れていることに注目すべきであろう。これはある

英語の変種において、それぞれのカテゴリーがどのようにみなされているのかという問題に関連するのではないだろうか。つまり、*that/zero* の交替は英語の変種を問わずある文体的特徴（例えば形式的か非形式的かという）を表わすものであると仮定すると、異なる英語の変種では同一のカテゴリーをその文体的特徴を有するものとして捉えているとは限らないということではないだろうか。グラフに沿ってもっと具体的に話しを進めると、*zero* が非形式的な文体的特徴のひとつだと考えた場合、K-R のfiction のように日常的なことばについては英米国とも同程度に非形式的なものと捉えられているのに対し、A (Press reportage)、E (Skills, trades, hobbies)、H (Miscellaneous) のようなカテゴリーについてはアメリカ英語の方がはるかに非形式的な扱い方をしているということになる。もちろん、*that/zero* の交替というたったひとつの文体的特徴をもって確定的なことは言えないが、Figure 6 は、異国間におけるひとつの書きことばのカテゴリーに対する考え方の違いという、いわば比較文化的な側面を言語資料によって研究する方向を示唆するものとして興味深い。

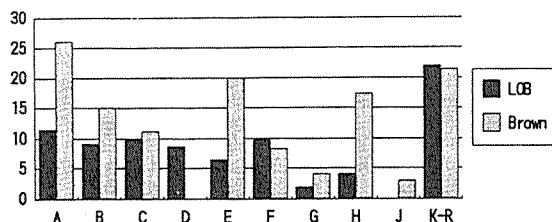


Figure 6 テキストのカテゴリーによる zero の比率 (%)

4. 本稿では *that* を普通伴うとされる動詞について、*that/zero* の交替がどの程度のものであるのかという疑問点から出発して、それを種々の要因下で数値として明らかにしてきた。この問題について客観的な数字の形で答えることができた以外に、調査過程で得られた、他の動詞についても一般的

に通じると思われる最も重要な事実は要因間の互助作用で、特に目的節の主語タイプと副詞類の有無という要因の間には非常に密接な互助関係があることが確認されたことである。今後の研究では要因は単独で扱われるのではなく、相互作用において検討されることが望まれる。

また、今回の研究によって新たな問題がいくつか提起された。そのひとつは、時間的経過により *zero* を用いる傾向がさらに強まった場合、今回取りあげた要因が *that/zero* の選択にどれだけ関係があるかということである。LOB、Brown ともに1961年時点での英語を資料にしているので、この問題はこれから将来にかけて調べてみる価値がある。筆者はこの問題に関し、最近では当時の英語と比べ状況が大きく変わっている印象を持っている。もうひとつ興味深い問題として浮かび上がったのは、英米語間で同じ動詞でも *that/zero* の比率に差があることである。これには英米語間でひとつの動詞が違った意味や異なる使用域で使われている可能性が考えられるが、そういうことも含め、別途詳細に原因を追求してみたい。

注

1. Fowler (1965), p. 624
2. 厳密には、Jespersen (1927), p. 34及びPoutsma (1929), p. 625で言及があるのは初版の Fowler (1926) に対してである。第二版の Fowler (1965) では一部に動詞の入れ替えがある。
3. LOB、Brown のカテゴリーと対応するテキスト数を付録に記した。
以下の議論では、LOB と Brown の対応の仕方にむらがなく完全であるものとしている。
4. 動詞を軸とするのは *that* を伴わない目的節の場合、LOB、Brown にはそれを他の方法では抽出できないからということもある。
5. 例えば *hold*, *state* 等は対象外の用法あるいは品詞で使われることが多いが、コンピュータではそれらも同時に抽出してしまい、手作業で排除しなければならない。

現代英米語における目的節を導く*that*の有無：通常*that*を伴うとされる動詞について

6. グラフ作成の基礎になったデータはすべて付録に記載した。
7. グラフ同様、本稿中の一切の数値は付録に記載のデータから算出した。

付録1 コーパスのカテゴリーとテキスト数

カテゴリー	テキスト数 (各約2000語)	
	LOB	Brown
A Press: reportage	44	44
B Press: editorial	27	27
C Press: reviews	17	17
D Religion	17	17
E Skills, trades and hobbies	38	36
F Popular lore	44	48
G Belles lettres, biography, essays	77	75
H Miscellaneous (government documents, foundation reports, industry reports, college catalogue, industry house organ)	30	30
J Learned and scientific writings	80	80
K General fiction	29	29
L Mystery and detective fiction	24	24
M Science fiction	6	6
N Adventure and western fiction	29	29
P Romance and love story	29	29
R Humour	9	9
合 計	500	500

付録2 基礎データ

表1 コーパス別の *that/zero* の分布

	<i>that</i>	<i>zero</i>	合計
LOB	391	31	422
Brown	365	46	411

大津智彦

表2 目的節の主語の種類による *that/zero* の分布
(*zero*の数/*zero*、 *that* の合計数)

	名詞	代名詞	合計
LOB	2/279	29/143	31/422
Brown	13/270	33/141	46/411

表3 副詞類の挿入の有無
(*zero* の数/*zero*、 *that* の合計数)

	挿入あり	挿入なし	合計
LOB	1/68	30/354	31/422
Brown	3/84	43/327	46/411

表4 目的節を支配する動詞の形式による *that/zero* の分布
(*zero*の数/*zero*、 *that* の合計数)

	不定形	定形	合計
LOB	9/155	22/267	31/422
Brown	11/144	35/267	46/411

表5 動詞による *that/zero* の分布
(上段：*zero* の数 下段：*zero*、 *that* の合計数)

	agr	ann	arg	ass	ind	lea	mai	obs	rem	sug	合計
LOB	3	4	0	2	3	4	1	0	0	14	31
	56	19	41	52	54	33	7	12	8	140	422
.....											
Brown	3	5	2	13	13	5	0	0	0	5	46
	30	36	39	62	96	45	8	18	10	67	411

現代英米語における目的節を導くthatの有無：通常thatを伴うとされる動詞について

表6 テキストのカテゴリーによる that / zeroの分布

(上段：zero の数 下段：zero、that の合計数)

	A	B	C	D	E	F	G	H	J	K	L	M	N	P	R	合計
LOB	5	3	1	2	2	3	1	1	0	2	6	0	0	4	1	31
	44	33	10	23	32	31	53	25	112	11	18	1	4	15	10	422
.....																
Brown	13	3	1	0	3	4	3	4	3	3	3	0	3	3	0	46
	50	20	9	10	15	48	75	23	105	14	13	1	11	10	7	411

参考文献

- Altenberg, B. (1991) "A Bibliography of Publications Relating to English Computer Corpora." In *English Computer Corpora.* pp.355-96. Edited by S. Johansson and A. Stenstrom. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Elsness, J. (1984) "That or Zero? A Look at the Choice of Object Clause Connective in a Corpus of American English" *English Studies*, Vol. 62. No. 6 : pp. 519-33.
- Fowler, H.W. (1965) *A Dictionary of Modern English Usage.* 2nd ed. Revised by E. Gowers. Oxford University Press.
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles.* Part III. London: George Allen & Unwin Ltd; reprint ed., Tokyo: Meicho Fukyu Kai, 1983.
- Johansson, S.; Atwell, E.; Garside, R.; and Leech, G. (1986) *The Tagged LOB Corpus, Users' Manual.* Bergen: Norwegian Computing Centre for the Humanities.
- Leech, G. and Fallon, R. (1992) "Computer Corpora--What Do They Tell Us about Culture?" *ICAME Journal* 16: pp. 25-50.
- McDavid, V. (1964) "The Alternation of That and Zero in Noun

大津智彦

- Clauses." *American Speech* 39: pp. 102-13.
- 大津智彦 (1993) 「現代イギリス英語における目的節を導く *that* の有無について」
『論集』(大阪外国语大学) 第9号、pp. 41-50。
- Poutsma, H. (1929) *A Grammar of Late Modern English*. Part I.
Groningen: Noordhoff; reprint ed., Tokyo: Senjo Publishing Co.,
19--?.
- Rissanen, M. (1991) "On the History of *that*/zero as Object Clause Links
in English." In *English Corpus Linguistics*. pp.272-89. Edited by K.
Aijimer & B. Altenberg. London: Longman.
- 斎藤俊雄 (編) (1992) 『英語英文学研究とコンピュータ』東京: 英潮社。